

「職務満足」からみた大学運動部員のマネジメント

～男女差に着目して～

スポーツマーケティングゼミナール 1314001 石川 真実

1. 研究動機・研究目的

大学などの高等教育の場における運動部活動は、学生の自発性や主体性を前提として構成される。活動内容や形態はそれぞれ異なるが、特に勝敗や記録の向上が最大の目的とされる大学の運動部活動の強化や活性化のためには、各競技の高度なコーチングはもちろん、部員のモチベーションを高めるための組織的な働きかけが不可欠である(小野里ら, 2013)。

ハーズ・バーグ(1987)は、仕事の効率性に対する従業員満足 of 構造を「動機づけ・衛生理論」(二要因説)として明らかにし、職務の内容と環境を要因とした「Job Satisfaction = 職務満足」(以下、「職務満足」)の概念を提示し、人間の活動に対する動機づけについて言及している。この概念では、人間の仕事における満足に関わる要因を「動機づけ要因」、不満足に関わる要因を「衛生要因」とした2つの種類があることを提唱し、仕事の生産性を高めるには「動機づけ要因」を機能させ、「職務満足」を高めることが効果的であると考えるものである。

このような「職務満足」をスポーツ組織における活動内容に反映した運動部のマネジメント研究として、江口(1999)や杉山ら(2002)、小野里ら(2013)の研究が報告され、競技スポーツのチームマネジメントに有効な研究方法として取り上げられている。しかし、性差による「職務満足」を引き起こす要因の違いに関する研究は未だ報告されていない。部員それぞれの主体性や能動性を促す働きかけおよび部全体の活性化につながるチームマネジメントという課題解決において、性差による価値観の差も考慮した上でのチームマネジメントも重要であると考えられる。

そこで本研究では、これまでの運動部を対象とした組織研究の経緯および実情をふまえ、大学運動部員の活動を動機づける要因と性別や活動満足度との関係を「職務満足」の視点を用いて明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

本研究は、女子ハンドボール部、男子フットサル部、女子ソフトボール部、男子サッカー部、男子硬式野球部、女子サッカー部の部員を対象に質問紙調査を行った。調査の趣旨を説明の上、同意の得られた部員に直接配布回収法による質問紙調査を実施した。調査員は筆者本人1名で行い、総回答数は278部であった。

質問項目は、大学運動部における部員のマネジメントを検討するにあたり、様々な組織・集団のマネジメント研究に用いられている「職務満足」の概念を踏まえ、小野里ら(2013)の先行研究を参考にし、個人の条件となる学年、役割、選手レベル、活動に対するモチベーションなどの基本特性に関する項目および調査対象集団である所属部の活動に対する満足度、さらに「職務満足」に関する項目を設定した。

収集したデータに対して統計ソフト IBM SPSS Statistics19 を用いて統計処理を施し、結果を分析、考察した。

3. 主な結果と考察

「部の活動に満足」に対する分散分析を行った結果、男性サンプルは「組織コミットメント」、「目標の達成」、「チームへの貢献」、「自己努力」の順に満足度に影響する要因であることが示され、女性サンプルは「組織コミットメント」、「部員同士のコミュニケーション」、「心理的要因」の順に満足度に影響する要因であることが示された。

男女差についての特徴的な反応を示した点としては、まず「職務満足」に対する各因子の関係である。男女ともに最も高い水準で有意差が認められたのは、「組織コミットメント」であったが、男性サンプルは次いで「目標の達成」、「チームへの貢献」、「自己努力」という結果であるのに対し、女性サンプルは次いで「部員同士のコミュニケーション」、「心理的要因」の有意差が高い水準で認められた。男性サンプルは自分自身の行動の成果が「職務満足」に強く影響しているのに対し、女性サンプルは周囲との関係が「職務満足」に強く影響している。この結果は、先行研究で明らかにされている、「男性は女性と比較して、より強い自尊感情を持っており、対して女性は男性と比較して、より共同的な価値観を持っている」という特徴が運動部という組織においても、同様に表れることを示しているといえる。

4. 結論

本研究は、大学運動部における部員のマネジメントを検討するにあたり、部員の活動を動機づける要因と活動満足度との関係を「職務満足」の視点を用いて男女別に分析・考察した。分析結果の比較から、男女共通または男女差がみられた特徴的な反応が示されるとともに、部員の満足度に対する因子スコアの比較から、満足度を高める要因が明らかとなり、チームマネジメントのポイントが示唆された。

5. 卒業論文の執筆を終えて

この研究を卒業論文として形にすることができたのは、担当して頂いた工藤先生の熱心なご指導や、運動部員の皆様が貴重な時間を割いてアンケート調査に協力していただいたおかげです。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。